

ID No.	1015
研究課題名	成人 T 細胞白血病リンパ腫 (ATL) に対する化学療法・同種造血幹細胞移植の治療効果に関する新規評価法の開発
研究代表者	福田 隆浩 (国立がん研究センター中央病院・科長)
研究組織	
受入教員	東條 有伸 (東京大学医科学研究所・教授)
研究分担者	藤 重夫 (国立がん研究センター中央病院・医員)
	田野崎 隆二 (慶應義塾大学・教授)
	井上 明威 (熊本大学・医員)
	内丸 薫 (東京大学・教授)
研究報告	<p>ATL患者における同種造血幹細胞移植において、移植後に再発をきたした場合の予後は極めて不良であり、大きな問題となっている。われわれは移植後のATLの再発や感染症合併を予測することを目的とする前向き観察研究を行った。平成28年度は症例のフォローアップと追加解析を行うと共に、平成28年8月に日本HTLV-I学会で中間報告を行った。</p> <p>本研究では、70歳未満の急性型・リンパ腫型のATLに対する初回同種移植症例を対象とし、移植前および移植後2, 4, 6, 8, 12, 16, 24週時点で12色のMulticolor FACSを用いた微少残存病変評価法: CADM1強陽性CD7陰性細胞(Kobayashi S, Uchimaru K, et al. Clin Cancer Res 2015)による検査に加えて、HTLV-1 プロウイルス定量検査やHTLV-1 Taxに対するCTL測定を行った。</p> <p>登録された25例のうちCRF回収が完了した22名の患者背景は、年齢中央値 58歳(36-68歳)、男性15名・女性6名、急性型19名・リンパ腫型2名であった。うち、5名で血液学的再発が確認された(中央値 day 89、範囲 day 39-182)。その5名のうち4名では、移植後に1%以下まで低下したCADM1強陽性CD7陰性細胞が、血液学的再発を来す1~3ポイント前より再出現していた(残りの1名は、移植前後の経過中、CADM1強陽性CD7陰性細胞が残存)。しかしCADM1強陽性CD7陰性細胞におけるCCR4や制御性Tリンパ球(Treg)のフェノタイプの割合が異なる場合も認めており、今後の詳細な解析が必要である。また22例中12例で移植前にMogamulizumab (MOG)が投与されており、その内6例が非再発死亡であった。われわれは、移植前にMOGを投与されたATL患者では、移植後の重症GVHDや非再発死亡のリスクが高いことを報告した(文献1, 2)。また同種移植適応年齢で、多剤併用化学療法が施行された70歳以下のaggressive ATLL症例に絞ったリスク分類(modified ATL-PD)を報告した(文献3)。病型・Performance status・補正カルシウム値・可溶性インターロイキン2受容体値・C反応性蛋白を指標とした本リスク分類により、3群に層別化が可能であった。追加症例も含めて、移植前後のTregの解析を行っており、再発リスクが高い症例群におけるMOG投与の影響を確認することは重要と考えている。</p>